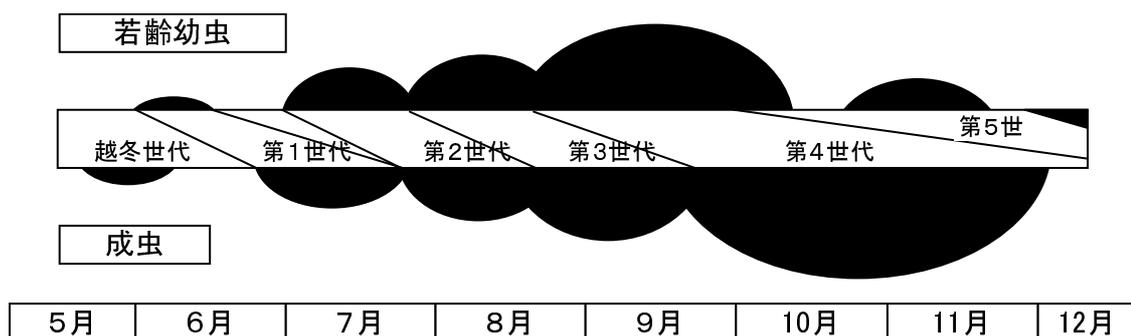


7-3. オオタバコガ

1. オオタバコガの発生生態の概要

年間5世代程度発生し、夏以降発生量が増加する。越冬世代成虫が5月下旬～6月上旬に、第1世代は7月上旬に出現し、約1ヶ月間隔で発生を繰り返す。8月以降は世代が重なり、明瞭な発生ピークはわかりにくくなる。同様に幼虫も8月以降は様々な齢期が観察される(下図参照)。



オオタバコガ発生消長パターンの模式図

成虫は茎頂部付近に1個ずつ産卵する。ふ化幼虫はナス、トマトでは産卵部付近の幼葉や蕾を食害した後、果実に食入する。バラ、キクでは花蕾や新芽等を食害する。幼虫の体色は褐色から緑色まで変異が大きい。中老齢幼虫は、よく移動するため、1頭の幼虫により多数の茎頂部や果実が食害される。

加害作物は多岐に渡り、野菜ではナス、トマト、ピーマン、オクラ、スイカ、キュウリ、エンドウ、イチゴ、キャベツ、レタス、スイートコーンなど、花きではキク、バラ、トルコギキョウ、カーネーション、宿根かすみそう、ケイトウなどである。

2. 防除対策

(1) 耕種的防除

幼虫による被害は大きいですが、加害している幼虫数は意外に少ない。果実内に食入した幼虫を見つけるのは困難だが、生育期のキク等の新芽に被害が発生している場合には、比較的発見しやすいので、虫糞を頼りに捕殺を行う。また、果菜類では被害果実に幼虫が食入している場合があるので、放置せず、圃場外へ持ち出し処分する。土中で蛹化するので、栽培終了後は耕耘し、蛹を残さないようにする。

(2) 物理的防除

施設栽培の場合は、4 mm 目合いネットで開放部（サイド、天窗）を被覆し、外部からの成虫の侵入を防ぐ。また黄色灯は水平照度 1 lx 以上で効果があるとされ、オオタバ

コガ以外にハスモンヨトウ等のヤガ科害虫にも効果がある。しかし、キクやイチゴ、水稲などの作物の生育に悪影響を及ぼす場合があるので注意する。また、露地栽培キクのように受粉の必要がない作物では、圃場全体を4 mm 目合いネットで被覆する方法も有効である。パイプハウス骨格を利用する方法が一般的だが効果である。一方、奈良県農業研究開発センターで開発した簡易な被覆方法は、低コストで設置できる。

参考：超簡易露地圃場ネット被覆法の開発（奈良県農業総合センター研究報告，2008）
<http://www.pref.nara.jp/secure/73720/39-1-4.pdf>

（３）性フェロモン剤

交信攪乱用のフェロモン剤（コナガコン、コナガコンプラス、コンフェューザーV）が登録されており、オオタバコガ被害作物全てで利用できる。ただし大面積での一斉処理が必要であり、5 ha 以上のまとまった面積での処理が望ましい。

（４）化学的防除

オオタバコガは新芽や花蕾、果実に食入するので、農薬散布の際にはこのような部位を狙う。発生モニタリング用のフェロモントラップが市販されているので、これを圃場に設置して定期的にモニタリングを行うことで、防除適期をある程度把握することができる。ただし設置場所によっては誘殺量の変動が大きいので、風通しの良い場所に設置する。

病害虫防除所が行った感受性検定では、有機リン系【1B】、カーバメート系【1A】、合成ピレスロイド系【2A】の多くの薬剤に対して抵抗性が発達しており、ネオニコチノイド系【4A】、ネライストキシシン系【14】薬剤も活性が低かった。効果が高い剤は、アフーム【6】、スピノエース【5】、トルネード【22A】、フェニックス、プレバソン【28】である。BT 剤【11A】ではクルスターキ系（エスマルク）は若齢幼虫に効果が高いが、アイザワイ系は効果が低い。また、遅効的で完全に死ぬまでに数日を要するが、処理2、3日後には食欲が減退し、ほとんど加害しなくなる。IGR 剤はアタブロン、マッチ【15】が若齢に効果が高いが、遅効的であり、効果が発現するまで数日間は摂食を続けるため、多発時の被害抑制効果は劣る。今後の抵抗性発達予防のためにも、同一系統（同じ IRAC コード）の薬剤を連用しないことが肝要である。

なお、実際の薬剤の使用時にはラベルに書いてある登録内容を確認して使用する。